

隠されている子どものうち、県立医大で手術されただけで12人が甲状腺がん（疑いを含む）と公表され、先の5人との重複関係についてはマスコミの記者会見でも答えませんでした。公式発表では、小児甲状腺がんは199人となっていますが、実際には少なくとも215人、間違いなくもっと多くいることになります。「放射能の影響とは考えにくい」と言い続けるために1人でも少なく見せようという努力が透けて見えます。

甲状腺がんは「予後がいい」というのは検査縮小派がいつも言っていることですが、それは死亡率が低いというだけで、患者さんの苦しみに関心をもたない言葉です。しかも、大人に

ついでに言えることです。子どものデータはチェルノブイリにしかありません。チェルノブイリでは手術しないケースでは死亡率も上がっていることから、32年経過した今でも甲状腺検査を続け、がんを見つければすぐ手術をしています。

原発（核）政策を優先させ、そのためには福島県民は、とりわけ子どもたちはどうなっても構わないとする安倍政権、その追従者たちを許すことはできません。何よりも子どもたちの命と健康を守るために「ふくしま共同診療所」は先頭に立ってたたかっています。基金や署名など、みなさまの一層のご協力をお願いします。

福島第2原発の廃炉表明とトリチウム汚染水の海洋投棄のねらい

6月14日、東電の小早川社長は福島県庁に内堀知事を訪ね、「福島第2原発を廃炉にする方向で検討する」と伝えました。それ自体は何の約束でもないのですが、少なくない福島県民が肯定的に受け止めたであろうことは考えられます。というのは内堀知事を先頭に、原発反対運動の一部が「第2原発廃炉」に絞って、これを「オール福島」の要求に仕立て上げていたからです。

どれほど東電が厚かましいといっても第2原発を再稼働できると考えていたわけではありません。廃炉しなければ帳簿上は「資産」ですが、廃炉にした途端に廃炉費用を計上しなければならなくなり「債務超過」になるという事情がありました。そもそも原発事故で倒産＝国有化が当然だったと

ころ、株主や銀行を損失から救うために税金を投入する仕掛けをつくったのですが、廃炉決定の遅延はその延長にありました。今回の「方針転換」は、別の税金投入の仕掛けをつくったということに他なりません。

今回、「廃炉の検討」を知事に伝えた裏に、何があったのでしょうか？

7月13日、経産省はトリチウム汚染水の海洋投棄のための公聴会開催を発表しました。今回の転換は、恩着せがましく「廃炉の検討」の手札を切ることによって、トリチウム汚染水の海洋投棄に道を開こうとするものです。汚染水タンクを空にし、デブリを取り出すためのスペースをつくるという筋書きです。そのための初歩的技術すらないデブリ取り出しです。それは再臨界の危険をはらんでいる、その場所への帰還強制と常磐線全線再開へと連なっています。

その時、「第2原発廃炉」を唯一の要求としてきて、今回の東電の表明を歓迎した運動体がどうなるのか、そこにもう一つの東電、政府の狙いがあったとも言えるのではないのでしょうか。私たち自身のたたかいこそが問われている時だと思えます。



東電による第2原発廃炉方針を報じる地元紙

保養を通して、福島の現状を伝えることが私の役割

震災・原発事故が起きてから、連休や長期休みのたびに保養に参加するようにしています。今年の夏も、4カ所の保養先を繋いで合計2週間、福島を離れて、保養に参加する計画です。子どもたちも、とても楽しみにしています。

友人に「保養に行く」と話をすると、「また行くんだね」と笑われることもあります。私は自分と子どもたちの年間被曝線量を下げること、もし将来病気になったとしても、「あのときもっと保養に行っていればよかった」と後悔したくないという思いで、必ず保養に参加しています。

保養先では、スタッフやボランティアのみなさんとの交流会があります。ボランティアで参加した大学生の方もたくさんいて、子どもたちとたくさん遊んでくれます。交流会では、私たち母親の話を熱心に聞いてくれるとともに、福島の人々の体験や話を初めて聞いて、「震災はまだ終わっていないですね」という感想を話してくれました。

若い世代がこのように感じてくれたことをとてもうれしく思いました。大学に戻って、まわりのお友達とかにもぜひ伝えてほしいと思います。

保養団体のなかには、福島の話に触れるのは

まずいと、腫れ物に触るように何も聞かれない団体もあります。しかし、それは「優しさではないのでは？」と思います。そこに触れないのは、お互いに不自然だと思うのです。



県外のみなさんに私たちの経験を伝えていかないと、風化して、現状を知ってもらえません。私は保養に参加させてもらっている立場として、全国のみなさんに、福島の真実を語り、伝えていく役割があると感じています。一人でも多くの方に話すことで、保養の必要性を感じていただけたらと思っています。

先日、家族5人でふくしま共同診療所で甲状腺エコー検査を受けました。とても丁寧に診ていただきました。私一人だけ結節が見つかって、びっくりしました。しかし、私たちの「味方」の先生のお話なので、落ち着いて話を聞くことができました。何かあったときの拠り所として、診療所が長く続いてもらいたいと思います。

（保養に参加している福島市在住のお母さん）

国に責任を認めさせるまで闘います

福島市在住Bさん

私の孫は原発事故が起きたとき、中学2年生でした。2年後（2013年）にあった初めての甲状腺検査で、孫はB判定と診断されました。その後、福島医大で何度か検診を受けていますが、昨年の秋の検査で「結節が二つ重なっている」と鈴木眞一教授から言われました。

そして、今年の3月に検査を受けたときには「結節が20mmを超えている」と診断され、8月に細胞診をすることになっています。その結果次第では、手術をすることになるかもしれません。

当時、中学2年生だった孫は二十歳になりました。本人は、「絶対に切りたくない」と言っています。細胞診だけでも嫌な思いをしているのに、もし手

術となったら、心にも大きな傷を負うことでしょう。

孫は、仕事もやっと決まったところでした。以前、鈴木教授に「甲状腺の疑いのことを面接で言ったほうがいいんですか？ 言わないほうがいいんですか？」と聞いたら、「言わないでください」と言われました。ある会社の面接のときにちょっと話をしたところ、それが原因かは分かりませんが、残念な結果になりました。

甲状腺がんは放射線のせいだということを認めてもらわないと、若い子たちはこれから生きていきません。私は国にきちんと認めさせるために、死ぬまで闘っていきたくと思います。